

なしいしの  
成長日記  
なしいしろうりっく



あらかじめ お

☆荒川凜緒

～下校中、公衆トイレでわざと～

「ふう……今日の練習はこれくらいでいいか……」

使い込まれたベースをしまい、ため息をついたのは、黒髪を腰のあたりまで伸ばした少女だった。

紺色のブレザーに白のブラウス。

水色に白のチェックが入ったスカートは、下着が見えそうなほどに短く改造されている。

剥き出しになっている太股は、陶器のように白く、ふくらはぎは黒の靴下で半分くらい隠されていた。

この少女の名前を、  
荒川凜緒（あらかじめ お）、  
という。

つぼみ学園では軽音部に所属し、ベース

とボーカルを担当しており、文化祭を前にして、部室で猛特訓……というわけだ。  
窓の外に視線をやれば、すでにとっぷりと日は暮れている。

「凜緒先輩っ。今日も遅くまでお疲れ様でした」

凜緒に声をかけたのは金髪碧眼の小柄な少女だった。

それ自体が輝いているのではないかと言われると信じてしまいそうなほどに明るい金髪を、凜緒と同じように腰と同じあたりまで伸ばし、凜緒と同じようにスカートを切り詰めて、制服を着崩している。

それだけ凜緒のことが尊敬しているということなのだろう。

「メロ、すまないな、こんな時間まで付き合わせてしまって」

凜緒の言葉に、メロと呼ばれた少女は首を振る。

「いいんです。凜緒先輩と一緒に練習できて楽しいですから。もうすぐ凜緒先輩と演奏できる、最後の文化祭ですからねっ」

「おいおい、まだ夏が終わったばかりだって言うのに気が早いな。私はまだ卒業して

ないぞ」

「でも、冬が終わったら……あっという間です。だから今のうちに凜緒先輩といっぱい練習しておきたいんです」

「ありがとな。そう言ってくれると嬉しいよ。メロがキーボードで練習に付き合ってくれて、私も助かってるんだぞ」

「メロ先輩のためなら、たくさん弾きますからねっ」

「ああ、よろしくな」

軽い談笑を交わしながら、凜緒とメロは楽器を片付けていく。

時計の針は、すでに18時を回っていた。

そろそろ校門の鍵を閉められてしまう時間だ……。



「それじゃあ、また明日な」

「はいっ。また明日です、凜緒先輩っ」

日が暮れて真っ暗になった校門で、凜緒はメロと手を振って別れる。こればかりは、家が逆方向にあるから仕方がない。

メロの家には一度だけ行ったことがあるが、父親がアメリカ系のやり手の貿易商らしく、庭に噴水がある感じの立派な屋敷だった。

「まあ、私はこっちの住宅街なんだがな」

凜緒は一人呟くと、街路灯が点々と続く夜道を急いでいく。

やや大股の、早足で。

先を急ぐのには、理由があった。

(ううーっ。おしっこしたい……!!)

凜緒は、おしっこを我慢していたのだ。

それも昼休みあたりからずっと。

凜緒は家路を逸れて、とちゅうにある公園へと入っていく。

誰もいない、ポツポツと水銀灯がともっている、小さな公園だ。

その片隅には、公衆トイレがあった。

男女も分けられていない、汚くて暗い公衆トイレだ。

凜緒は、たまにこの公衆トイレのお世話になることにしていた。

トイレに一步踏み込むと、なんとも言え

ない悪臭が鼻を突く。  
だが、ここなら人がこないから安心だ。

(漏らさなくてすんだ、な……)

凜緒は真っ暗な個室に入ると、鍵を閉める。

そこはあまり使われていない水洗トイレだった。

トイレットペーパーはとっくの昔に空になって、電気も薄暗い。

狭い個室には、和式のトイレがちょこんとあるだけだった。

凜緒は、そんな和式トイレの前に立つと、ショーツを下ろす。

その瞬間、

もわ……。

ツーンとしたアンモニア臭が、トイレの悪臭を上塗りしていく。

ライブの練習で思いっきり歌っていたし、おしっこが漏れそうなプレッシャーでいっぱいおまたやお尻に汗をかいた。

だから、凜緒が愛用している、白と水色のしましまショーツはジットリと汗に湿っ

ていた。

それに染みこんでいるのは汗だけではなかった。

女の子の恥ずかしい染みを隠すための二重布……クロッチには、シュッとレモン色の縦筋が刻まれていた。

(やだ、こんなに漏れてたなんて)

女の子の尿道は、太く、短い。

それに子宮があるから、その分だけ膀胱が小さくできている。

だから、お腹の底から声を出したり、くしゃみをすると、どうしてもチビってしまうのだ。

それに加え、クロッチには凧緒の少女の汚れが、カスタードクリームのようにベトトリとこびりついていていた。

身体は大人へと成長しているのだが……、

(そして今日も生えてないのか……)

凧緒は、ショーツで覆われていたおまたを見つめて、顔をしかめてしまった。

凧緒のそこは、産毛さえも生えていない  
真正銘のパイパンだったのだ。

学校ではクールな先輩キャラがすっかり  
定着しているけど、凧緒の女の子の部分  
は、子供のようなおしっこ臭いおまただっ  
たのだ。

（おしっこ臭いおまたなんて、赤ん坊みたい  
じゃないか。はあ、早く生えてこないか  
なー。せめて産毛くらいは欲しいよなー）

ヒクヒクと痙攣している一本筋を見つめ  
ながら、そんなことを考えていると、

——プシュッ、

おしっこが噴き出してきてしまう。  
（ああ、まだダメッ。ちゃんとぱんつ穿い  
てからじゃないとっ）

そのまま和式の便座に跨がるかと思われ  
た凧緒。

……だが。

凧緒は再びショーツを穿くと、あろうこ  
とかそのまま和式の便座に跨がったではな  
いか。





(はぁ……ずっと我慢してたから、今日はたくさん出るぞ……)

しましまショーツに刻まれた縦筋が、ヒクヒクと痙攣すると、

ジワリ……、

暗い染みがクロッチに浮き上がったではないか。

凜緒の、子供のころからの癖。  
——おもらし遊び。

いつからか、凜緒はおもらしを気持ちいいと思っていた。

きっかけは……多分、おねしょだったと思う。

凜緒は、■学年くらいまでおねしょをしていた。

それにおしっこを我慢して、我慢して……、それから出したときの開放感も好きだった。

「ああ……でちゃう……。わたし、おもらしちゃうんだ……」

おしっこを我慢していたというのに、いざショーツを穿いたままだそうすると、緊張して上手く出てきてくれない。

お腹に力を入れても、縦筋が刻まれたショーツがヒクヒクと苦しげに痙攣しているばかりだった。

「んんっ、んんんんん……っ」

それでも凜緒は、お腹に力を入れていく。

このトイレには水道がないから、ここでおもらししたらショーツを洗うこともできない。

それにトイレットペーパーもないから、おまたを拭くことができない。

(取り返しのつかないことになる……)

それが分かっているからこそ、凜緒のおまたは更に熱くなっていく。

「ぱんっ、穿いたままおしっこしちゃうんだ……。こんな歳にもなって」

凜緒はおまたに力を入れ続けていくと、

プシュッ——。

「あっ、でちゃうっ」

クロッチの裏側に聖水が弾け、ジワリ、  
取り返しのつかない温もりが広がる感触。

プシュッ。

しょわわわわわわわわわ……。

凜緒のショーツから、くぐもった水音が  
聞こえてくる。

少女の恥ずかしい染みを隠すためのクロ  
ッチには、あっという間に暗い染みが浮き  
上がっていく。

その染みはじわじわと大きくなり、会陰  
を伝ってお尻のほうへと広がっていった。

「あぁ……私、おもらししちゃってるんだ  
……」

シュイイイイイイイイ……。

ブルルッ。

凜緒は頬を緩ませると、官能的に身体を  
震わせる。

ショーツが食い込んでいる股間はヒクヒクと痙攣し、熱い聖水を漏らし続けていた。

「おしっこにおまたくすぐられてるみたいで……あはっ、やっぱりくすぐったいな」

このおまたがくすぐられている感触が好きだった。それにおまたに弾けたおしっこは、会陰を伝ってお尻へと流れていく。

「はぁ……。お尻、撫でられてる感じがして、気持ちいい……」

しょわわわわわわ……。  
ぽた、ぽたた……。

お尻を撫で回される感触。  
お尻の膨らみから垂れていくおしっこが、和式便器の水面に弾けていく。

「おしっこ……。勝手に出てきて……。ずっと我慢してたから……。気持ちいい……」

シュイイイイイイ……。

緊張も解けてくると、おしっこの勢いも

激しくなっていく。

クロッチを突き破るほど……、とまではいかないけど、勢いのない噴水のようにおしっこが出てきている。

ジョボボボボボボボ……。

「はぁ……。やっぱり気持ちいいな……。おもらしは」

生暖かいおしっこは、クロッチの裏側に弾け、生暖かい手でお尻を撫で回してくれて、包み込んでくれる。

この取り返しのつかない感触が好きだった。

「お尻、温かくて気持ちいい……。」

もしかしたら、この感触はずっと赤ん坊の頃におむつを充てて、母親に抱かれているときにおしっこをしてしまったころの憧憬が、記憶のどこかに残っているのかも知れなかった。

しょおおおおおおお……。

「もう、ぱんつグショグショになってる…



…。はぁぁ……。おしっこ、勢いなくなってきた……」

ブルルッ!!

——プシュッ!!

凜緒が大きく身震いし、おしっこが勢いよく噴き出すと、凜緒のおもらし遊びは唐突に終わった。

「ああ、気持ちよかった……。ああ、もうぱんつ、冷たくなってきてる」

当然のことだけど、このトイレには水道もないから、ショーツを洗うこともできなかった。

それにトイレットペーパーも置いてない。

この濡れたショーツを穿いて帰るしかないのだ。

「外、誰もいないよな」

凜緒はスカートの裾を整えると、何事もなかったかのように公衆トイレを出る。

人気のない住宅街の夜道。

凜緒の他には誰もいない。



「はぁ……気持ちよかったけど……、なにやってるんだろ、私」

家まで歩いて五分。

凜緒は、平然とした表情で、夜道を歩き始める。

まさか凜緒が、ミニスカートの中におもらしでグショグショになったショーツを穿いているとは、誰も思わないだろう。

(ショーツ、お尻に張り付いてきてるな)

おしっこで濡れたショーツが、ペッタリとお尻に張り付いてくる。

よく見れば、凜緒の内股にはおしっこの筋が垂れてきているのが分かるだろう。

(なにやってんだろ……。ホントに、私)

とは、冷たくなったショーツを穿きながら、いつも思っていることだ。

それでも凜緒は、またおもらし遊びをしてしまう。

その証拠に、凜緒の秘筋は、熱い蜜で濡れていた……。



「それじゃあ凜緒先輩、また明日です！」

「ああ、またな」

翌日の放課後。

いつものように練習を終えて、メロと手を振り合って帰路につく。

さっきまでは一生懸命に練習をしていたけど、こうして夜道を歩いている凜緒の頭の中は、早くもおもらし遊びのことで一杯になっていた。

(ああ、今日は昼休みからずっと我慢してたから、今にもおしっこ、出てきそうだ……っ)

膀胱が水風船のようにパンパンに膨らんで、今にも出てきそうだった。

きっと、和式便器にしゃがみ込んだ瞬間におしっこが噴き出してくることだろう。

そのことを考えるだけで、おまたがヒクヒクと痙攣し、熱く濡れてくるような思いだった。

(早くおしっこしたいしたい……！)

そんなことを考えながら夜道を歩き、いつもの汚い公衆トイレへと入っていく。なんとも言えない悪臭に顔をしかめながらも、いつもの個室に入り、鍵を閉め……。そのときだった。

ジョツ——!!

「あっ、ダメッ！ まだ！」

きっと、ここでおもらし遊びをしていることが、身体に染みついてしまっているのだろう。

鍵を閉めた瞬間に、勝手におしっこが噴き出してきてしまった。

ショーツの裏側に、生暖かい感触が広がる。

「もう、我慢できない……っ」

一度出てきてしまったら、女の子の短い尿道では止めることなどできるはずもなかった。

また、凜緒はおもらしを気持ちいいことだと理解してしまっている。

そんな身体に、おしっこを止めることなどできるはずもない。

「でる……、出ちゃう……!!」

凜緒は、カバンを放り投げると、和式の便器へと勢いよく跨がっていた。

……ショーツを穿いたままで。

愛用している、白と水色のしましまショーツが露わになると、

ぷっしゃあああああああああ!!

その瞬間、少女の恥ずかしい染みを隠すためのクロッチという二重布を突き抜けて、おしっこが便器の金隠しに弾けた。

「んっ、んんんっ、はあああああ!! 我慢してたから、す、凄い勢いだ……ううっ」

プシュ！ プシュッ！  
プッシュァァァ！

おしっこを我慢した末に放尿すると、男でいう射精に近い快感を得ることができると言われている。

今の凜緒が、まさにそうだった。

「んんー！ おまたが勝手に震えて……お  
しっこ、止まらない！ 凄すぎてっ、嘔き  
出してくるっ」

縦筋が痙攣するたびに、くしゃみのよう  
におしっこが嘔き出してくる。

……が、その快樂は、すぐに終わってし  
まった。

「ああ……勢い、弱くなってきちゃった…  
…」

しゅiiiiiiiiiiiiiiiiii……。

一気に放出してしまったせいか、凜緒の  
おしっこの勢いは急速に衰えていく。

勢いの弱くなってきたおしっこはクロッ  
チに弾けると、会陰を伝ってお尻を撫で回  
して、和式トイレの水面へと落ちていっ  
た。

「もう、終わっちゃったのか……。でも、  
凄かったな……。それに気持ちよかった…  
…おまた、ビククッてしちゃったし」

まだヒクヒクと痙攣している縦筋を見つ  
めながら、凜緒は熱い吐息をついている。

……が。  
それは、急に訪れた。

ギュルル……。

「あれ、お腹痛い、かも？」  
お腹から奏でられる不協和音。  
そういえば、今朝はいつもあるお通じが  
なかった。  
昼にヨーグルトを食べたけど、それが効  
いてきたのだろうか？  
だけど、なににも慌てることはない。  
なにしろ、ここはトイレなのだ。  
ショーツを降ろせば、いつだってうんち  
をすることができる。  
だが、凜緒はふと思い立ってしまったの  
だ。

「うんち……漏らしたらどうなるんだろ  
う？」

おしっこを漏らしただけでこんなに気持ち  
いいのだ。  
もしも、うんちを漏らしたら、どんなこ  
とが起きるのだろうか？

「そんなことしちゃ、ダメ……」

理性では分かってはいる。

水道がないから、ここでうんちなんて漏らしたら、ショーツを洗うこともできない。

……大変なことになることは、分かっている。

それでも、何度もおもらし遊びをしてきた凜緒には、その誘惑から逃れることなどできなかった。

「うんちおもらし、したい……」

どうせうんちが一本出てきて、それでお終いだらう。

そう思って、凜緒は、少しずつ、お腹に力を入れていく。

「ふっ、ふうう……んっ、んんんんんんんんっ」

だけど、身体のどこかでセーブがかかっているのだろう。

どんなにお腹に力を入れても、縦筋がヒクヒクと痙攣するばかりで、うんちが出てきてくれる気配はなかった。